



秋中だより

スローガン 未来は自分でデザインする

藤沢市立秋葉台中学校

校長 福田 まり

2026(令和8年)10月15日

2026年10月号

第51回紅葉祭「創造の翼を広げよう！！」

9月18日、今年度の紅葉祭が開催されました。みなさんの素晴らしい作品、授業や委員会、部活動で心を込めて作製した作品は、どれも個性が輝く素晴らしいものでした。また、ステージ発表では、5組さんの力強い和太鼓演奏から始まり、図書委員会の「ブレーメンの犯罪者」、また、藤沢市みらい創造財団から特別講演として金管五重奏「Smoked Brass Quintet」のみなさんの素晴らしい演奏、3年英語ステージ「My School Trip to Hiroshima/Kyoto」、3年ACT「平和宣言」、午後からは吹奏楽部の演奏と盛りだくさんの内容でした。

1日を通して、今年度のスローガン「創造の翼を広げよう！！」を体現する豊かな心と未来を自分自身で彩る素敵な紅葉祭となりました。

保護者の皆様におかれましては、平日にもかかわらず、とても多くの方においでいただき、ありがとうございました。

平和について自分事として考える～3年「平和宣言」の発表から～

本校が大切にしている学びの一つに、総合学習での平和学習と広島への修学旅行があります。今年の3年生も6月に広島を訪れ、原爆資料館などで歴史の現実に触れてきました。旅行後には、3年間の平和学習のまとめとして一人ひとりが「平和宣言」を執筆。先日の紅葉祭では、代表生徒6名が全校生徒へ向けて自分の言葉で力強く平和への思いを届けてくれました。真剣に考え抜かれたそれぞれの言葉に胸を打たれるとともに、広島での体験が生徒たちの心にいかに深く根づいているかを痛感いたしました。多感なこの時期に本物に触れることの意義を、生徒たちの成長した姿を通して改めて教えてもらった心地です。代表生徒6名の平和宣言をご紹介します(原文のまま)

皆さんにとって 平和とはなんですか?1945年、8月6日、とてつもない閃光、そして爆音と共に、広島は町は壊されました。平和記念資料館にあった絵には、水を求め川に飛び込む人、焼けただれた皮膚、溶け落ちた目で町を彷徨う人がいました。そのどれもが、あの時広島にあった地獄です。なぜ、人は戦争をするのでしょうか。なぜ、人は、自分と同じ種が住んでいる世界を、その一部を地獄に変えることができるのでしょうか?自分たちの正義を絶対だと思い込み押し付け、人の生活を壊す。そのどこにも、僕は平和を思い至りません。原爆が落とされる前、幸せに生を全うしていた魂たちを忘れないために、僕達には何ができるのでしょうか?僕はそれを「事実を忘れないこと」だと考えます。二度と起こしてはならない過ちだと心に刻み生きることが、今を生きる僕たちにとって一番大事なことでありたいと思います。そしてそれが可能になれば、平和へとまた一歩、また一歩と近づくことが出来るとも。一人一人の人間が、世界に産み落とされた地獄を知り、忘れず覚え続けられれば、悲しさで涙を流す人はいなくなると思います。僕はそれが、それこそが「平和」であると胸に誓い、生きていくことをこれからの世界に望んでいます。

31組 Mさん

「ここに、頭があったはずなんです」私の瞳に映ったのは、小さな幼稚園の制服を、涙ながらに見つめるおばあさんの姿でした。原子爆弾の影響で亡くなった、妹さんの制服です。広島が被爆してから、八十一年。日本には、今でもこの記憶に苦しんでいる人がいます。記憶は、嫌だったことばかり残ります。貴方は、若い頃のことをどれほど覚えていますか。今からたった十年前の記憶を、どれほど思い出せますか。当時を生きていた人々は、たった一発の爆弾を、今でも鮮明に覚えているのです。いくら年を重ねても、街がどれだけ発展しようとも。ある手紙には、こう綴られていました。「私には、青春と呼ばれる時代はありませんでした。」と。その言葉は、単なる後悔ではなく、どうしようもない、やり場のない嘆きのように思えました。2026年を生きる私たちは、被爆者と同じ苦しみを味わうことはできません。理解しようとしても、経験がないものには、どうしても、どうしてもわからないのです。悲劇を悲劇として終わらせず、たった一度だけでも自分ごととして捉えてみる。今、周りにいる人を大切にすること。貴方を支えてくれる多くの人は、決して当たり前ではありません。どれだけ、この日常を大切と思えるか。それが、私たちにとってできる、最大の「理解」なのではないでしょうか。いつか、世界中の誰もが迷いなく「平和だ」と答えられる世界になることを、私は願っています。

31組 Sさん

あなたが思う平和とはなんですか。私が思う平和は、「世界に笑顔が広がっていること」です。しかし、一人ひとりが思う平和や価値観は違います。その小さな「意見の差」や「価値観の違い」を受け入れられないことから、時に大きな被害をもたらす戦争へと発展してしまうのです。いつもの大切な日常を、戦争は簡単に奪ってしまうのです。私は平和記念資料館で、そのことを心から学びました。大切な命を簡単に消してしまうこと。色鮮やかな世界、日常、心を、真っ暗闇に包みこんでしまうということ。かつてヒロシマ、ナガサキに原子力爆弾が落とされました。たった一発で、人が、街が、色が、笑顔が消えてしまったのです。その苦しみは今も続いています。だからこそ、原子力爆弾はなくなればなりません。しかし、今もそれを持つ国があり、今この瞬間もどこかで戦争をしています。私が思う平和、「笑顔が広がる世界」を実現するためには、戦争の原因をなくさなければなりません。その私が思う原因とは、意見のすれ違いや価値観の違い、文化の違いを「拒絶してしまうこと」ではないでしょうか。だからこそ私たちは、自分と違う意見や文化を認め合い、会話していく必要があると思います。笑顔あふれる世界の未来をつくるために、私たちは今、何ができるでしょうか。まずは隣にいる人の小さな「違い」を認めることから、始めてみませんか。

32組 Iさん

一枚の絵。それは僕の心に深い印象を与えました。被爆後目玉が飛び出た子どもの絵です。木に腰掛け、飛び出る目玉を抑えていました。一九四五年八月六日の広島は地獄でした。水を求めて川に飛び込んだ人、全身皮膚が焼けただれた人、水を求め黒い雨を飲んだ人。みんな僕達と同じ一人の人間です。僕の心には一つの疑問が残りました。「今の世の中は『平和』と呼べるのか」語り部さんは言いました。「世界に原爆は何発あると思いますか」百や千などではありません。約一万二千発です。それも日本が落とされた二発の原爆よりも更に強いものです。日本に原爆はありません。ですが世界はどうでしょうか。アメリカやロシアは約五千発ずつ保持しています。「平和とは何なのだろう」僕はこう思いました。よく耳にするのは戦争や争いごとがない世界。ですが、食料が足りない人、水を汲みに川までいかなければならない人、この人たちはどうなるのでしょうか。戦争や争いごとがないだけで平和と呼べるのでしょうか。差別や貧困が世界にはたくさんあります。僕は思いました。「平和」とは戦争がなく誰もが毎日を当たり前前に生きていることではないかと。皆さんは今の世の中は「平和」と呼べますか。日本国内は「平和」かもしれない。だが世界で言えば僕は「平和」とは言い難いと思う。「平和」と呼ぶために、まずは何があったのか知ることから始めましょう。

32組 Sさん

あなたは幸せになりたいですか。この質問になりたくないと思える人はいないと思います。でもそれは、81年前に広島で暮らしていた人々も同じでした。1945年8月6日、午前8時15分、突然ドーンという爆発音とともに建物を次々に破壊するほどの爆風と皮膚が溶けるほどの熱が当時の広島を一瞬で地獄と化しました。資料館には、「あついよ…助けて…お母さんどこ…?お母さん…!」という必死に助けを求める子供の言葉が残されていました。文字を見ているはずなのに、その声が今にも聞こえてくるように感じ、胸を締め付けられるような感覚を味わいました。さらに、ひどい火傷を負った人や焼け野原となった広島の写真を目にし、さらに胸が締めつけられ、その写真や遺品を直視することはできませんでした。広島を訪れる前から戦争は残酷な出来事だとは知っていましたが、心のどこかで「昔の出来事」と思っていました。しかし、81年が経った今も、原爆の後遺症に苦しむ人がいるという現実を目の当たりにし、戦争は決して過去の出来事ではないと気づかされました。友達や家族と笑って話せること、ご飯を三食食べられること、両親が厳しくしてくれること、両親が過保護になってくれること。その何気ない毎日は決して当たり前ではありません。だからこそ「平和=当たり前」ではなく、「平和=一人一人が守り続けなければならないもの」なのだと思います。私は今後、日常を当たり前と思わず過ごしていきたいです。最後に聞かせてください。あなたにとって幸せとは何ですか。そして、今ある当たり前は本当に当たり前なののでしょうか。私はまだ、その答えを探し続けています。

33組 Sさん

「ドン」という異常な音とともに押し寄せる爆風。残留放射線によりもがきながら亡くなっていく人々。これらは全て、八十一年前、広島で確かに起こった実話である。午前八時十五分、ありふれた日常の朝に、「それ」は落ちた。原子爆弾である。その「一発」が、ヒロシマを地獄へと変えた。人々は、ただれた皮膚の痛みを耐えながら水を求めた。何が起きたのかを知らぬまま、一瞬で消え散った。我が子の姿を探すため、死体であふれかえるヒロシマを歩いた。そうすることしかできなかったのだ。自分に問いかけてほしい。これ以上、こんなことがあって良いのかと。唯一の被爆国に暮らす私達だからこそ、できることがあるのではないかと。私達は、被爆者の声を直接聞くことができる最後の世代だと言われている。だからこそ、私達が平和について考え、後世に語り継いでいく必要がある。私達は創らなければならない。核兵器のない、誰もが幸せと感じられる世界を。そして、黒い雨の降らない、青い空の下で、当たり前の日常がやってくる世界を。

33組 Iさん

今年度の秋中スローガンは「未来は自分でデザインする」です。今回掲載した「平和宣言」を読むと、生徒たちが過去の歴史を直視するだけでなく、「では自分たちはどう生きるか」「どんな未来を創るべきか」を主体的に考えていることが深く伝わってきます。違いを受け入れる優しさや平和を守ろうとする決意など、自分たちの手で豊かな未来をデザインしていこうとする生徒たちの成長を、これからも学校・家庭・地域が一体となって温かく見守り、支えてまいりたいと思います。

ぜひご家庭でも今回の発表を話題にさせていただき、生徒たちが投げかけた問いや平和への思いについて、世代を超えて共に語り合う機会となれば幸いです。

学校だよりへの感想
ご意見はこちら→

